

皇學館大学文学部コミュニケーション学科小史

山 田 やす子

1. コミュニケーション学科の発足

コミュニケーション学科は、昭和60年度よりの臨時的定員増の解消に伴う改組転換により、平成12年4月1日に発足した。平成27年度現在16年目を迎え、教職員と学生が一丸となって充実した学科を運営すべく日々努力している。

開設年度である平成12年度の専任教員は、教養科から移籍した竹本晃教授（学科主任）、森真一助教授、豊住誠講師および新規採用の上久保達夫教授の4名であった。しかし、実際の運営は翌平成13年に教育学科より移籍予定の奥野純一教授、教養科より移籍予定のジョン・ダイクス助教授、山田やす子助教授の3名を加えた7名によっておこなわれた。また、教養科と兼務という形でコミュニケーション学科に事務助手が配属された。コミュニケーション学科研究室は、旧非常勤講師控え室を改装して3号館1階に設置された。

初年度は、学科設置認可（平成11年12月22日）後に学生募集が開始されたという事情もあり、入学生数は定員80名に対して45名と大きく定員を割った。しかし、新設学科に対する教員、学生双方の期待と思いは大きく、少人数という利点を生かして、何事に対しても教員と学生が話し合い、協力しあって取り組む1年となった。初年度に生まれた教員と学生の間結びつきの強さは、16年を経た現在までコミュニケーション学科の特色の1つとして生き続けている。

2. 教員数と学生数の推移

(1) 教 員

発足当時のコミュニケーション学科は、主に旧教養科から移籍した教員とコミュニケーション学科設置に際して新規採用された教員で組織された。そのため、初年度の平成12年度から完成年度となる15年度までの間に順次移動がおこなわれた。14年度には、教養科から移籍した西山正容教授と新規採用の川添裕教授が加わった。15年度には、教養科から外山秀一教授、増井節郎教授、村石凱彦教授が移籍し、コミュニケーション学科教員12名がそろった。

16年度には学科開設に尽力された奥野教授が再び教育学科へ移籍、年度末に村石教授が退任された。17年度には、共通科目英語担当の川村一代講師が学科所属教員として着任。この年4月末に、学科開設から5年間にわたり学科主任を務め、学科の発足、発展に尽力された竹本晃教授が急逝され、学科は深い悲しみに包まれた。18年度末には西山教授が退任され、19年度に共通科目情報担当の前田至剛講師が学科所属教員として着任。21年度末に川添教授が退任。23年度には、社会福祉学部から池田久代教授・児玉玲子教授・張磊教授が移籍、年度末には増井教授が退任された。24年度には増井教授の後任として佐藤武尊助教が着任。25年度には佐藤助教が教育学部へ移籍、上久保教授、森教授、ダイ

クス准教授が退任された。26年度には英語担当のクリストファー・メイヨー准教授と、認定心理士課程新設に伴い芳賀康朗教授が着任。池田教授、前田准教授が退任された。27年度には心理担当の川島一晃助教が着任。27年度現在教員は9名である。

学科科主任は、12年度から16年度までを竹本教授が、17年度から22年度までを増井教授が、23年度、24年度を豊住教授が、25年度、26年度を外山教授が務め、27年度からは児玉教授が務めている。以下に、発足から16年間の教員の移動を表の形で示す。

コミュニケーション学科所属教員の移動

平成12年度	4名	竹本（主任）・上久保・森・豊住
平成13年度	7名	奥野（教育学科より移籍）／ダイクス・山田（教養科より移籍）
平成14年度	9名	川添（新任）・西山（教養科より移籍）
平成15年度	12名	外山・増井・村石（教養科より移籍） 奥野（教育学科へ移籍）
平成16年度	11名	村石（退任）
平成17年度	10名	増井（主任） 川村（新任） 竹本（逝去）
平成18年度	10名	西山（退任）
平成19年度	10名	前田（新任）
平成20年度	10名	
平成21年度	10名	川添（退任）
平成22年度	9名	
平成23年度	12名	豊住（主任） 池田・児玉・張（社会福祉学部より移籍）増井（退任）
平成24年度	12名	佐藤（新任・平成25年度より教育学部へ移籍）
平成25年度	11名	外山（主任） 上久保・森・ダイクス（退任）
平成26年度	10名	芳賀・メイヨー（新任） 池田・前田（退任）
平成27年度	9名	児玉（主任） 川島（新任）

（2）学 生

コミュニケーション学科の1学年の学生定員は80名である。開設年度の入学生数は45名と大きく定員を割り、13年度も61名と低調であったが、14年度からは時として定員を割るものの70名から90名ほどではほぼ順調に推移している。27年度には開設以来初めて入学生数が100名を超えた。

21年度より中国からの留学生の受け入れを開始した。21年度には、9月に河南大学から3年次編入生として2名の学生が入学している。22年度より、河南大学に加えて河南師範大学からも留学生を迎えることとなり、以降継続的に9月入学の留学生を受け入れている。

学科の完成年度となった15年度には、第1回の卒業生を送り出した。16年度からは9月卒業が実施されるようになったため、コミュニケーション学科においても学生が9月にも卒業するようになった。23年度以降の9月卒業生には、3年次編入で9月に入学した留学生も含まれている。

以下に、発足から16年間の入学生数と卒業生数の推移を表で示す。

	入学者数			卒業生数		
	4月入学	9月入学	計	9月卒業	3月卒業	計
平成12年度	45		45			
平成13年度	61		61			
平成14年度	78		78			
平成15年度	94		94		33	33
平成16年度	87		87	0	51	51
平成17年度	93		93	3	72	75
平成18年度	87		87	0	69	69
平成19年度	71		71	1	69	70
平成20年度	80		80	0	95	95
平成21年度	83	2	85	2	72	74
平成22年度	77	3	80	2	52	54
平成23年度	78	5	83	5	64	69
平成24年度	80	4	84	5	79	84
平成25年度	70	4	74	9	71	80
平成26年度	90	4	94	6	70	76
平成27年度	108	5	113	5		

3. 学科の充実

(1) 取得可能資格

コミュニケーション学科においては平成27年度現在、図書館司書、司書教諭、博物館学芸員の資格および小学校、中学校、高等学校の教員免許ならびに認定心理士資格を取得することができる。

初年度から、「図書館司書」と「博物館学芸員」の資格取得が可能であった。15年度には、「司書教諭」の資格が加わり、さらに中学校、高等学校の英語の免許をはじめとする教員免許の取得が可能になった。すなわち、主免許として「中学校教諭一種免許状（英語）」・「高等学校教諭一種免許状（英語）」、副免許として「中学校教諭一種免許状（国語・社会）」・「高等学校教諭一種免許状（国語・地歴・公民）」が認められた。21年度からは中学校教諭一種免許を有する者に対し副免許として「小学校教諭二種免許状」が、24年度からは「小学校教諭一種免許状」の取得が認められるようになった。25年度からは、人間関係コースにおいて英語の免許を取らずに「中学校教諭一種免許状（国語・社会）」・「高等学校教諭一種免許状（国語・地歴・公民）」を取得することが可能になった。さらに26年度からは「認定心理士資格」の取得が可能になった。

コミュニケーション学科での英語教員免許の取得は、発足当初より学生からもまた外部からも待望されていた。平成14年3月11日に文部科学省より英語教員免許の認可が下り、実際の適用は15年度入学生からということになった。適用期間は14年4月1日からであったので、14年度入学生（3期生）にも遡って適用された。この制度を利用して、3期生の十数名が4期生とともに英語の教員免許を取得した。また、制度の適用からは外れたが2期生の数名も必要科目を履修し、個人申請で免許を取得している。2期生については履修科目の多くが卒業単位として認められなかったため、免許取得には

大変な努力を要した。本学科初の英語教員は2期生から出ている。現在、本学科出身の英語教員が多数公立、私立の中学、高校で専任教員として活躍している。

また、毎年10名ほどの学生が中学の英語・国語・社会の教諭免許とともに小学校教諭免許の取得を目指して努力している。本学科出身の小学校教員も増えてきた。

（2）専門演習および研究旅行

平成13年度から2年生を対象とする「基礎演習」が開講され、4クラスに分けて4名の専任教員が担当した。基礎演習は、「専門演習」に入る前に大学での学びの基礎を学習するための演習と位置づけられた。なお、基礎演習は8期生が2年生となった20年度までで終了となった。

14年度からは「専門演習Ⅰ」が、15年度からは「専門演習Ⅱ」が開講された。専門演習は、開講初年度から16年度までは学科教員全員が担当した。17年度から23年度までは、共通科目担当教員であることや、移籍直後であるなどの事情から専門演習を担当しない教員もいたが、24年度からは学科教員全員が担当している。

「専門演習Ⅰ」においては、1期生から他学科と同様に9月にフィールドワーク（旧研究旅行）を実施している。フィールドワークは演習のクラスごとに実施しているが、目的地の多くが海外であるということが、異文化理解を教育目的の1つとするコミュニケーション学科の特色であるといえる。これまでに実施された研究旅行の海外の目的地は、アメリカ、オーストラリア、韓国、中国、台湾、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシア、ベトナムなどである。

（3）卒業研究

コミュニケーション学科では、必修科目として「卒業論文」ではなく「卒業研究」を課している。「卒業研究」においては卒業論文以外に翻訳、作品制作、共同研究なども認められている。一般的には卒業論文を提出する学生が多いが、これまでに日本の昔話の英語訳（単独）・絵本制作（単独）・伊勢市の紹介冊子制作（共同）・映画制作（共同）などの卒業研究も提出されている。共同研究の評価については、個人の担当領域が明確であることと、個人作成による報告論文の提出が必須要件となっている。

（4）設備の充実

コミュニケーション学科においては、専門演習および卒業研究で情報処理作業や映画制作をおこなうなどデジタル機器を多用する。開設年から順次学科研究室のテレビ、DVD、コンピュータ、コピー機などが整えられた。さらに、平成17年度からは学科研究室の隣に「コミュニケーション学科デジタルスタジオ」が開設され、専門演習の学生を中心に多くの学生がデジタル機材を学習、研究に活用している。

（5）コース制の導入

平成21年度より、コミュニケーション学科で何が学べ、また学んだことを将来どう生かせるかをより明確に示すため、コース制を導入している。

「人間関係コース」は、コミュニケーションや人間関係について幅広く学び、多彩な一般企業をはじめ、マスコミ、公務員などへの就職をめざすコースである。「英語コミュニケーションコース」は、コミュニケーション能力に加え、英語力を重点的に身につけ、英語教員や英語を必要とする企業など

への就職をめざすコースである。ただし、両コースの間に厳格な縛りはなく、学生は各コースの履修モデルを参考にして、自由に履修科目を選ぶことができる。

4. 学会活動

コミュニケーション学科では、文学部の他の学科にならない開設年度の平成12年に「コミュニケーション学会」を発足させた。初年度の活動としては、5月にコミュニケーション学会総会、11月には総会に続いて第1回コミュニケーション学会講演会を開催した。年度末には「コミュニケーション学会会報第1号」を発行した。また、10月にはコミュニケーション学会主催で「第1回高校生英語スピーチコンテスト」を開催した。英語スピーチコンテストはその後毎年継続されており、コミュニケーション学会を特色づける行事の1つとなっている。

13年度以降も初年度と同様、5月に総会、10月に高校生英語スピーチコンテスト、11月の倉陵祭学会において総会と講演会を開催し、年度末に学会会報を発行した。16年3月に1期生が卒業したため、17年度の倉陵祭学会では、講演会に先立って卒業生1名による研究発表がおこなわれた。18年度以降は、倉陵祭学会においては前年度の優秀卒業研究発表をおこない、講演会は他学科と同様に別の日程で実施することになった。なお、倉陵祭期間中の学会は24年度以降実施していない。

(1) 講演会

12年度から26年度までの講演会の講師と題目は以下のようである。

コミュニケーション学科 講演会	
平成12年度	川添裕氏（見世物文化研究所代表） 「身体とメディアの百年—1900年からの便り—」
平成13年度	杉田幸博氏（FM AICHI 勤務） 「放送の現状と未来」— 見えないコミュニケーション —
平成14年度	神田卓郎氏（岐阜女子大学助教授） 「共通語と方言」— アンビリーバボーな関係 —
平成15年度	西田勝氏（愛知淑徳大学教授） 「ボクと映画」
平成16年度	後藤希望氏（NHK オリンピック放送通訳者） 「オリンピックと英語通訳」
平成17年度	蘭和真氏（東海女子大学教授） 「英国生まれの近代スポーツを考える」
平成18年度	千種清美氏（フリーライター） 「情報発信」— 伊勢志摩の魅力 —
平成19年度	（予定していた講演者の都合により中止）
平成20年度	瀬川智紀氏（海星中学校教諭） 「大学生活を楽しむための10の方法」
平成21年度	田中忍氏（三重映画フェスティバル実行委員会事務局長） 「地方における映像文化との関わりについて」
平成22年度	玄道文昭氏（元歴史街道推進協議会海外広報部長・現ツーリズム研究者） 「旅すること— 歴史とロマンをたずねて」

平成23年度	岩本茂樹氏（関西学院大学社会学部准教授） 「コミュニケーションに潜む多様な世界」
平成24年度	馬淵伸隆氏（法務省社会復帰調整官（津保護観察所）） 「医療観察制度の現場から」
平成25年度	久保博嗣氏（一般社団法人三重県指定自動車教習所協会専務理事） 「警察が目指しているもの」
平成26年度	勝野哲氏（中部電力株式会社代表取締役副社長） 「新たなエネルギー計画と電気事業」

（2）高校生英語スピーチコンテスト

コミュニケーション学科の学会活動の特色を示すものの1つとして、「高校生英語スピーチコンテスト」があげられる。これは、三重県教育委員会、中日新聞社、三重県高等学校英語教育研究会、日本英語検定協会の後援を得て、コミュニケーション学科主催で開催されるもので、開設年度の平成12年度を第1回として今年度まで継続して開催されている。

例年10月に開催されるこの行事では、英語担当教員の指導のもと、学生が主体となって司会進行などの運営をおこなっている。毎年主に県内の高校十数校から40名ほどの生徒が出場し、英語のテキストの暗唱を競い合っている。

（3）コミュニケーション学会会報

コミュニケーション学会では、事務助手の協力を得て担当幹事が中心となり、初年度より毎年「コミュニケーション学会会報」を発行している。初年度は、学生の協力も得て製版、印刷、製本などをすべて手作業でしたが、次年度からは印刷、製本を業者に委託するようになった。平成27年3月には第15号が発行された。

（4）研究部会

コミュニケーション学科では教員が以下の研究部会を運営している。

研究部会（平成27年度現在）	
英語コミュニケーション研究部会	児玉・豊住・メイヨー・川村
情報コミュニケーション部会	張
地域文化研究部会	外山
心理学研究部会	芳賀・川島
異文化研究部会	山田
グローバルコミュニケーション研究部会	メイヨー

（5）十周年記念

コミュニケーション学科は平成22年4月1日に十周年を迎えた。十周年を迎えるに当たり、21年度に記念行事として次のような行事をおこなった。

- 10月22日 十周年記念・『コミュニケーションの風景』刊行
- 10月25日 十周年記念・第十回高校生英語スピーチコンテスト
- 11月1日 十周年記念・ホームカミングデー（研究発表会、卒業生の近況報告、懇親会）

『コミュニケーションの風景』には、当時の教員10名と、1期生から6期生までの卒業生24名、また7期生から10期生までの在學生10名が執筆している。ホームカミングデーの研究発表会とそれに続く卒業生の近況報告会には卒業生と在學生が100名近く参加した。

その夜に二見浦のホテルで開催された懇親会には50名を越える卒業生が集まり、教員と親しく語り合い、在学当時の話に花が咲いた。

5. 学生の就職

コミュニケーション学科は、平成16年3月に1期生を第1回卒業生として送り出した。27年3月には12期生が卒業している。コミュニケーション学科の卒業生の進路として特徴的なのは、企業・団体への就職が圧倒的だということである。過去3年間の就職状況は以下の如くである（「進学」には9月卒業の留學生の大学院への進学も含まれている）。

平成24年度：企業・団体（86.3%）、公務員（6.5%）、進学（8.2%）

平成25年度：企業・団体（76.1%）、福祉（2.8%）、公務員（2.8%）、教員（5.6%）、進学（12.7%）

平成26年度：企業・団体（77.4%）、福祉（4.8%）、公務員（1.6%）、教員（6.5%）、進学（9.7%）

就職先は、農林・建設・製造・ガス供給・情報通信・運輸・卸売・小売・金融・保険・サービス業など他業種にわたっている。また、ほぼ毎年コミュニケーション学科出身の警察官や消防士が生まれている。

【附記】平成24年度に提出した原稿に加筆して、平成27年度現在までのコミュニケーション学科の歴史を記した。

（やまだ やすこ・皇學館大学文学部教授）

【編集担当者附記】本稿は、『皇學館大學百三十年史』各説篇に掲載のため準備された原稿であるが、同書の刊行を見送ることとなったためここに掲載させていただいた。